

### 三、戦乱の続いた大野

#### 1 平安時代の終わりごろ

##### 武士のおこりと平民の落人

平安時代の貴族たちは、地方の農民が納める税で生活をしていました。しかし、しだいに貴族の数は多くなっていき、農民たちの税の負担も重くなりました。生活が苦しくなった農民は土地を捨てて逃げ出すようになりました。このような時、国司や郡司は、自分の利益のことだけしか考えず、政治をかえりみず、中には自分で勝手に領地を持って、その土地に住みつく者も現れてきました。莊園の間では互いに勢力争いがおこり、自分の領地を守るために、身内の者や莊園内の農民たちに武芸を習わせました。国司や郡司も同じようにして領地を守り、ほかからの侵入を防がなければならなくなりました。やがて、力を持った貴族の中から、狩りや馬の扱いなど武芸に親しむ者も現れはじめ、朝廷や上級貴族の護衛として、地方では盗賊の取り締まりや税の運搬の護衛、莊園や各領地の護衛として働き始め、武力を持つ集団をつくるようになりました。これが武士の始まりです。また、大きな寺には武力を持った僧兵と呼ばれる僧が

現れ、寺や寺の莊園を守りました。牛原莊や小山莊などにも、このような武士がいたかもしれせん。

やがて、都で平氏という武士の集団が力を持つようになり、それまで力を持っていた貴族の藤原氏にかわって政治をおこなうようになりました。貴族中心の政治に不満を持っていた人々は喜び、特に武士たちは自分たちの時代が来たと期待しました。しかし、平氏のおこなった政治は貴族中心のものとかかわらず、また、平氏の一族を率いていた平清盛は太政大臣という位について、政治の実権を握るようになりました。これに対して、貴族やほかの武士が不満を持ち始め、やがて源氏を中心とした武士の集団が平氏と争うようになり、越前も戦争の舞台となりました。一一八三年（寿永二）、源氏側の武士である源（木曾）義仲は、平氏を倒すため信濃（長野県）から越前に入り、燧城（今庄町）を築きました。その途中、平泉寺（勝山市）に立ち寄り、寺の仕事をとりまどめていた僧である齋明たちを味方につけました。その後、京都にいた平氏側の武士である平維盛が、義仲を倒すために燧城に向かうと、味方についた齋明が義仲を裏切ったために、義仲は越後（新潟県）まで追いつまされてしまいました。しかし、義仲は、俱利伽羅峠（富山県と石川県の県境）での戦いをきっかけに反撃をおこない、平氏は京

へ逃げ歸り義仲も京に向いました。この時にちりぢりに逃げた平氏の人たちは山奥へ逃げ込み、そこに住みつくようになりました。大野にも「平家」の名が付いた地名が残っており、この時落ちのびた平氏の人たちが住みついたのではないかと伝承が残っています。また、「平家踊り」や「扇踊り」などは、平氏が遠い都を懐かしがって踊ったものと伝えられています。

5

## 2 鎌倉時代の山野

**幕府の成立と荘園** 一一九二年（建久三）、源頼朝は、朝廷の承認を受けて、武士による政府である幕府を鎌倉（神奈川県）に開くと、各地に住む武士の中には、御家人という幕府の家来になる人も出てきました。御家人は幕府に仕えることを条件に、自分の土地を治めることを幕府から認められました。またそのほかに、幕府は、国ごとに政治や治安を守る役目の守護と、荘園や国の土地（公領）ごとに税の取り立てや土地の管理をおこなう地頭を配置しました。越前にも守護所（守護の役所）がおかれ、地頭は各地の荘園や公領に入りました。このとき、大野に

15

10

は牛原莊うしがはらしやうや小山莊おやまのしやうのほかに、泉莊いずみのしやう（市街地北西部あたり）や西園寺家領さいおんじの富田莊とみたのしやうがあったことが知られています。

現在大野には、阿難祖領家あんどそりやうけ・阿難祖地頭方あんどそじどうほう・平沢領家ひらさわりやうけ・平沢地頭ひらさわじどう・森政領家もりまさりやうけ・森政地頭もりまさじどうという地名が残っています。これらはこのような莊園や地頭じどうに関係する土地で、領家りやうけというところは莊園しやうえんの領主またはその代理者が所有していた土地の名残なごりだと考えられます。地頭方じどうほうとは地頭の土地という意味だと考えられます。

地頭じどうは莊園しやうえんから税を取り立てる権利を持ち、さらに莊園しやうえんの中では警察けいさつのような役割りを持ったために、しだいに莊園しやうえんや公領こうりやうで力を發揮し、無理な取り立てをおこなうこともありました。このように莊園しやうえんと地頭じどうとの対立たいりつが激はげしくなると、莊園しやうえんはしだいに地頭じどうにおされ、地頭じどうに土地を奪うばわれることもありました。牛原莊うしがはらしやうでは、莊園しやうえんの人たちが地頭じどうの支配しはいについてたびたび幕府ばくふに訴うったえをおこしたという記録が残っています。

この両者の争いを解決する方法として、地頭方じどうかたと領家方りやうけ（莊園領主しやうえんりやうしゆ）に土地（下地したじ）を分ける方法がとられるようになりました。関係する土地の中央さかいに境さかいの線を引いて二つに分ける場合もありましたが、割合が一對一とは限らなかつたようです。この分け方を「下地中分したじちゆうぶん」といって、分けたところを絵図えずに示しました。

その名残なごりが多く残のこっているとところもあります。

**幕府の滅亡** 幕府と御家人ごけにんの關係は、御家人ごけにんが幕府ばくふのために戦たたかって敵てきを倒たせば、その土地ちを褒美ほうびとして与あたえられる、というものでした。

一二七四年（文永十一）と一二八一年（弘安四）の二度、中国の王朝おうちやうの一つの元げんという国が日本に攻め込んできました。御家人ごけにんたちは必死に戦たたかい、元げんの兵を追おい返かえしましたが、元げんの土地ちを奪うばったわけではなかつたので、幕府ばくふには褒美ほうびとして与あたえる土地ちがありませんでした。褒美ほうびをもらえると期待きたいしていた御家人ごけにんの中には、それを不満ふまんに思おもう者ものが出てきました。また、政治せいじに対する不満ふまんも重なり、一三三三年（元弘三）、足利尊氏あしかがたかうじや新田義貞にったよしさだたちによつて幕府ばくふが倒たされました。

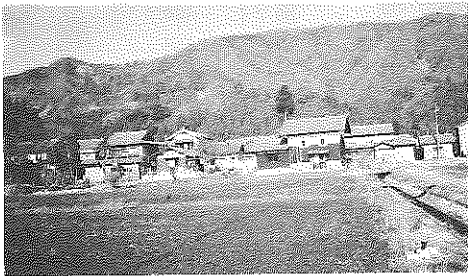
このころ、大野では平泉寺へいせんじと牛原庄うしがはらしやうが互たがいに争いいを繰くり返かえし、そのほかの者ものはどちらかの味方みかたについていました。鎌倉幕府かまくらばくふが不利ふりだと思おもつた平泉寺へいせんじは、牛原庄うしがはらしやうを奪うばおうと九頭竜川くずりゅうがわの筈はずの渡わたし（勝山市大渡）を渡り、一氣いっせきに牛ヶ原うしがはらに攻め込みました。牛原庄うしがはらしやうの地頭じとうだった淡川右京亮あいかわうきやうのすけときはる時治ときはるは、味方みかたの兵へいも次々に逃にげていき、最後さいごには追おい詰められて赤根川あかねがわで妻つまと子どもと一緒にいっしょに自害じがいしてしまいました。この話は、鎌倉幕府かまくらばくふの滅亡めつぼうのことが中心ちゆうしんに書かかれた『太平記たいへいき』という物語ものがたりにも出て

## 越前牛ヶ原地頭自害事

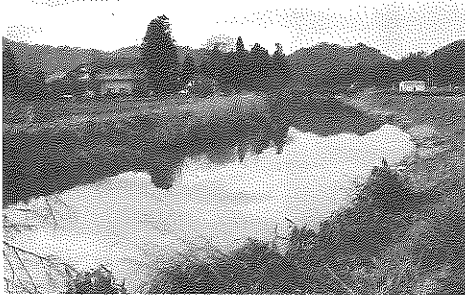
当時、京都を取り締まっていた鎌倉幕府の役人であった淡川時治は、鎌倉幕府を倒そうとする軍と幕府軍が京都で戦っている時に、地方でもおこっていた争いをおさめるために越前の牛ヶ原にきました。しばらくして、京都にある鎌倉幕府の役所であった六波羅が敗れたという知らせが入ると、それまで幕府の味方についていた武士たちはとたんに逃げ出し、家族や一部の家来のほかは周りにいなくなりました。

その後、平泉寺の僧兵たちは、この機会に領地を奪おうとほかの武士たちと組み、一三三三年（元弘三）五月十二日の日中、七千人の軍で牛ヶ原を攻めました。時治は大勢の敵が押し寄せるのを見ると、とてもかなわないと思い、数十人の家来に敵の軍を防がせている間に僧を呼び、死んだあと

に極楽に行けるようにと、涙を流しながら妻や子どもたち、家来の髪の毛を切りました。僧が帰ると、時治は妻に向って「二人の子どもたちは、敵につかまると殺されるだろうから、私と一緒に死のう。お前は女だから、たとえ敵につかまっても殺されることはないだろう。もし生きのびたら、新しい人と結婚してこの辛い出来事を忘れてしまいなさい。私がお前が辛い思い出を持って生きていくのが心残りだ。」と話しました。それを聞いた妻は、「水辺にすむオシドリや家の軒下に巣をつくるツバメでも、夫婦の仲を



牛ヶ原城跡の遠景



赤根川（矢付近）

忘れることはありません。まして私たちは十数年の間一緒に過ごし二人の子どもも育てました。いつまでも一緒にいようと思っていたのに、あなたは今死のうとし、子どもたちも朝露が消えるように命を断とうとしています。私はこの悲しみをこらえながら生きていくことはできません。どうせ生きていくことができないのであれば、あなたと一緒に死んで

しまいたいです。」と泣き伏しました。

このようにしている間に、敵を防いでいた家来たちはみな殺され、平泉寺の僧兵たちが笹の渡し（勝山市大

渡）を越えて味方の軍の後ろにある山に来たとの報告を聞くと、時治は五、六歳になる子どもたちを鎧を入れる箱の中に入れて、二人の乳母（子どもの世話をする女性）に担がせ、鎌倉川（赤根川）の淵に飛び込んで死ぬよう命令し、一行を見送りました。すると、母親も子どもたちと一緒に死のうと思ひ、悲しみながらついていきました。

一行が川の淵に到着し箱の蓋を開けると、事情を知らない子どもたちは、「お母さん、どこに行くの。お母さんが歩くのかわいそうだからこの箱に乗りなよ。」と何事もな

いようにいいました。それを聞いた母親は涙を流しながら「この川は、極楽にあるきれいな水をたたえた池で、小さな子どもたちがたくさん遊んでいるところです。さあ、お祈りをしながら川の中に行きましょう。」といいました。母親と子どもたちが、極楽のある西の方角におかたて坐り、手を合わ



坐禅岩（宝慶寺）

せてお祈りをすると、二人の乳母たちは子どもたちをそれぞれ一人ずつ抱いて、緑色の水の中に飛び込みました。母親もその後

を追って同じ所に飛び込みました。その後、時治もあとを追って自害しました。

## 苦しい庶民の生活と新しい仏教

平安時代の終わりごろ、人々は末法思想（仏教を開いた釈迦の教えが衰え、世の中が乱れてしまうという考え）が広まる中でたいへん不安に思っていました。また農民や領主たちは、地頭から無理な取り立てを受けて苦しい生活を送っていました。

これまでの仏教は、一部の貴族たちだけが信仰し、一族の繁栄を祈るものでした。このような中、さまざまな僧が一般の人や武士にもわかりやすい仏教を考え出し、これをきっかけに仏教は広く人々に信仰されるようになりました。特にそれまで貴族の間に信仰されてきた浄土教の考え方をさらにわかりやすくした浄土宗や浄土真宗は、北陸地方の農民たちを



中心に広く信仰され、大野にもこの宗派しゅうはの寺が数多く建てられました。

また一方、道元どうげんという僧は中国に行つて禅ぜんの修行しゆぎやうをし、曹洞宗そうとうしゆうという禅宗ぜんしゆうの仏教を開いて人々に広めました。道元は中国から帰つたのち、もともといた京都の寺で修行しゆぎやうをしました。京都を離れると、大野に来て禅師峰ぜんじぶつの庵いおりに入り、その後永平寺へいじ（永平寺町）を開き、やがて多くの僧がここで修行しゆぎやうをするようになりました。道元が著した『正法眼蔵』しょうぼうげんぞうという禅ぜんの書物しよもつは、世界的な思想の書として知られています。

その後、道元どうげんと一緒に中国で修行しゆぎやうをした寂円じやくえんが、道元どうげんのあとを追つて日本にやつて来て、永平寺えいへいじで修行しゆぎやうをしました。道元どうげんが亡くなると永平寺えいへいじを離れ、銀杏峰ぎなんぼう（大野盆地南西部）にある大きな岩の上で、十八年間座禅修行ざぜんしゆぎやうをしたと伝えられます。当時、美濃みの（岐阜県）の伊自良莊いじらじやうの地頭じとうで、大野の小山莊おやまのじやうにも力を持っていた伊自良氏いじらしの協力で、小山莊おやまのじやうの木本郷このもとこうに寺を開きました。この寺が宝慶寺ほうきやうじで、寂円じやくえんが修行しゆぎやうしたと伝えられる岩は坐禅岩ざぜんいわと呼ばれています。

宝慶寺ほうきやうじの宝物殿ほうもつてんには、寂円じやくえんが遺した、道元どうげんのただ一つの生前の肖像しやうざう（「月見の像」）や、道元どうげんが鎌倉幕府かまくらばくふの執権しつけんであった北条時頼ほうじよときよりに与えた法語ほうごなどの貴重な文化財きちやうが残されています。

### 3 南北朝から戦国時代へ



日吉神社（日吉町）

南北朝時代の<sup>なんぼくちよう</sup>大野 一三三三年（元弘三）に鎌倉幕府が滅びると、幕府にかわって天皇による政治が復活しました。このころ、鎌倉幕府を倒すため天皇に協力した新田義貞の親戚である堀口氏政が、美濃（岐阜県）から大野に来て居（亥）

山城（別名土橋城と呼ばれることもある）に住みました。城といっても天守閣はなく、砦のようなものでした。居山城があった場所は、現在は日吉神社（山王さん）になっています。

一三三五年（建武二）、鎌倉幕府を倒すため義貞と一緒に活躍した足利尊氏は、朝廷に反抗し、今までの天皇を京都から追い出して幕府を開きました。この幕府を室町幕府といえます（北朝とも呼ぶ）。一方追い出された天皇は吉野（奈良県）に逃げ、これとは別の朝廷を開きました（南朝と呼ぶ）。この時代を南北朝時代と呼び、以後、北朝と南朝

との間で、地方の武士たちを巻き込んで各地で争いが続きました。

その時大野にいた氏政は、義貞の味方となり、南朝軍として戦うことになりました。

氏政は、一三三九年（延元四）七月、由良越前守光氏（大野の西方寺の城

清瀧の砂山のあたりにいたと考えられる）たちと協力して、南朝方に味方する武

将とともに、黒丸城（福井市）に城を構えている北朝方の足利高経を攻めました。

戦いに敗れた高経は加賀国（石川県）に逃れ、加賀国に勢力を持っていた富樫氏の協力を得て、黒丸城を取り返そうとしました。

高経は足利方の高師直（北朝）を大将として、加賀や能登（石川県）、越中（富

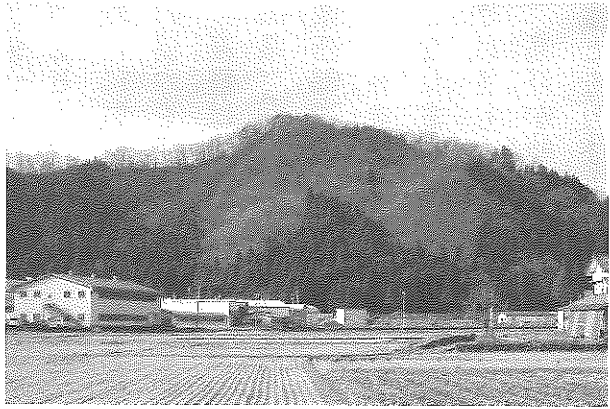
山県）の軍勢を率いて南下し、土岐弾正（北朝）は美濃（岐阜県）や尾張（愛知

県西部）の兵を率いて穴馬（和泉村）方面から大野に入りました。

平泉寺をはじめ大野にいた武士たちは弾正の軍に味方したため、大野は北朝側となりしました。この戦いは高経軍の勝利となり、黒丸城は再び北朝の手に取り戻

されました。

高経が越前の守護となると、高経の孫の斯波義種が大野の戌山城（犬山）の城主となりしました。戌山城は犬山城とも書かれ、亀山から約五百メートル西にある



成山城址（犬山）

小高い丘に築かれた山城のことです。この城も砦のようなものでした。

義種の兄の斯波義重は室町幕府の中でも管領と呼ばれる将軍を助ける重要な仕事をしており、朝

倉氏・織田氏・甲斐氏・二宮氏・千福氏などを家

臣に持ち、さらに越前や尾張、遠江（静岡県西

部）の各国の守護を兼ねていたので大きな勢力が

ありました。成山城にいた弟の義種が、守護代と

して越前国を支配したこともありました。義種の

子の満種の代からは、斯波の姓を名乗ることをや

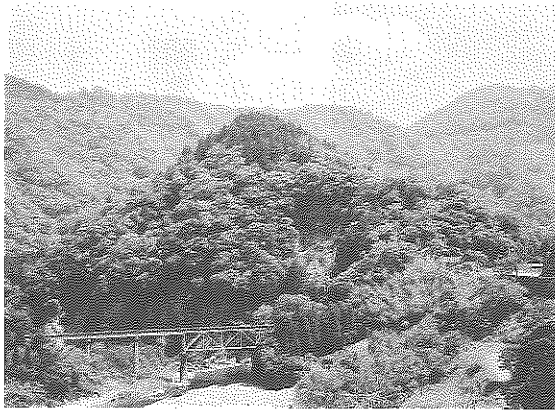
め、大野の地名をとって大野左衛門佐満種とし

ました。その後、大野修理太夫持種・同修理太夫

ました。その後、大野修理太夫持種・同修理太夫

義鏡・斯波氏の家臣である千福中務大輔が成山城主となったようです。

その後、斯波一族の代表者を決めることで一族の中で争いがおき、やがてほかの武士たちの間におこっていた対立も巻きこんで、一四六七年（応仁元）に大きな争いになっていきました。これを応仁の乱といいますが、応仁の乱では各地の



將監城址（西勝原）

武士たちは東軍と西軍にわかれ、各地で争いをおこし、斯波氏の一族も東と西にわかれて争いを繰り返してしまいました。

当時、大野は斯波氏と家臣の二宮將監が治めていました。一四七一年（文明三）、西軍についていた斯波氏の家臣であった朝倉氏は、幕府から越前の支配を認めるという約束をもらって東軍に寝返り、斯波氏を攻めて越前を支配しました。一四

七五年（文明七）には、成山城を攻め、城をのとりました。このとき、將監と佐開の館にいた斯波義敏は土橋城（日吉神社のあたり）に入り、朝倉氏に対抗していましたが、朝倉孝景は直接土橋城を攻めることをやめ、同年七月二十二日、城内の敵を伊野部郷（乾側あたり）まで誘い出して合戦をいどみました。この戦いで、將監をはじめ弟の駿河守たち百五十人を討ち取りました。このときも義敏はまだ土橋城にこもっていたので、孝景は土橋城を出るよう強く勧めました。ようやく身の危険を感じた義敏は、これに応じて無事に京都



一乗谷朝倉氏遺跡（福井市）

に帰りました。この結果、大野郡は朝倉氏が支配することになりました。

またこの戦いについて、一説には、将監は最後は将監城（西勝原）にたてこもり、近くの「みくまの淵」で自害したとも伝えられています。

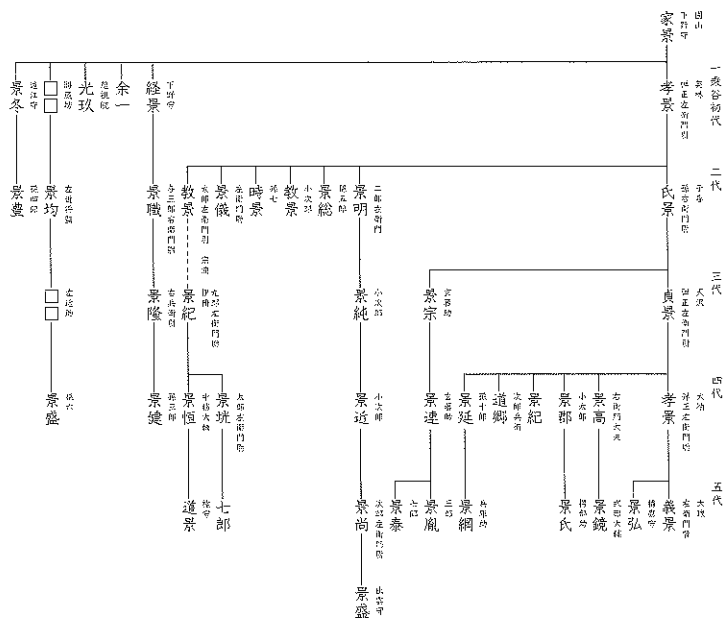
**朝倉氏の越前支配** 応仁の乱がおけると、幕府による政治が乱れ、各地の武士

たちが争う戦国時代に入っていました。

一四七一年（文明三）に越前の守護になった朝倉氏は、対立する武士たちと戦

ったり約束を結んだりして、越前を支配するようになりしました。この時期、各国の守護は莊園や国の土地などを自分の土地に組み入れ、地元の武士たちを家来にしたりして大きな力を持つようになっていました。戦国時代になると、幕府に頼らずに自分たちで領地を治め、ほかの武士たちとの戦いに備えるようになりました。この武士たちを戦国大名と呼びます。

戦国大名である朝倉氏は、一乗谷（福井市）に城をつくると、領地を支配するために重要な場所



朝倉氏系図 (福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館要覧より)

を一族の者に治めさせました。大野では、朝倉光玖が居(亥)山城(日吉神社のあたり)に入つて、この地方の政治をおこないました。その後は朝倉景高や朝倉景鏡が治めました。

この時代、全国では力を持った大名たちが互いに勢力争いをしていました。その中でも尾張国(愛知県西部)にいた織田信長は、このような大名の中でも一段と力をつけ、全国を統一しようとしていました。信長は、当時すでに力を失っていた室町幕府の将軍を支えて京都に行きましたが、この将軍がほかの大名たちと手を結んで反抗するようになる、信長はこれらの大名たちを次々に破り、一五七三年(天正元)に将軍も追い出して



専福寺（友兼）

室町幕府を滅ぼしました。

またこのころ、鎌倉時代におこった浄土真宗を信仰する農民たちが集まり、守護や領主に反抗するようになっていました。これを一向一揆と呼びます。

当時、浄土真宗は仏光寺派や専修寺派（高田派）、三門徒派、本願寺派に分かれていましたが、早くから各地方に勢力を広げていたのは本願寺派を除く三派でした。大野でも高田派系の寺として専福寺（友兼）をはじめ多くの寺が建てられ、たくさんの門徒を集めていました。一方本願寺派は、第八代法主蓮如の時に、吉崎御坊（あわら市吉崎）を拠点として、すごい勢いで越前と加賀（石川県）にその勢力を広げ始めました。特に本願寺派は、農民の心を惹きつけ、村全体を本願寺派に転向させる方法をとったので、高田派はもちろん、地方を支配する守護や地頭などの武士たちに対して油断のならない勢力となりました。領主に反感を持つ武士たちは本願寺派と



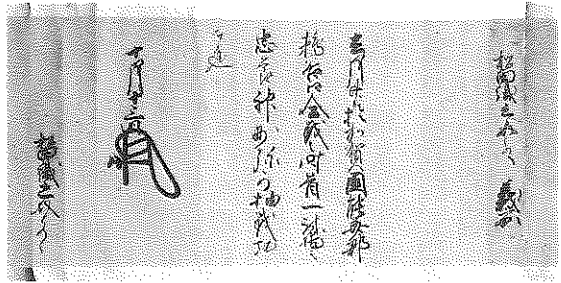


朝倉義景肖像（福井市心月寺蔵）

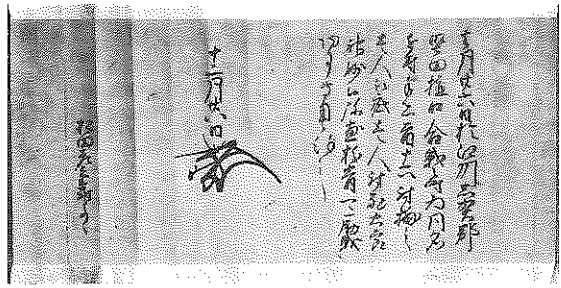
なり、その勢力を利用して領主たちに反抗もしました。領主もまた、本願寺派の力を抑えようとして武力でこれに対抗しました。

一四八八年（長享二）、ついに本願寺派は加賀をはじめ越前や越中（富山県）の門徒を集め、加賀国守護の富樫政親が近江（滋賀県）に出陣している留守をついて、本拠地の高尾城（石川県金沢市）を攻めました。こうして加賀の一向一揆が始まりました。

彼らは、本願寺派の味方をしない高田派、三門徒派の寺を打ち壊し、味方になるよう強制しました。一五〇六年（永正三）七月、一揆の勢力は越前にも入り、九頭竜川以北を占領しました。越前を支配していた朝倉貞景は、これに対抗して朝倉教景（宗滴）を主力の大将として藤島（福井市）に陣を構え、大野の戌山城主の朝倉景職は鳴鹿（坂井郡）に出陣しました。景職の軍とともに、大野の高田派寺院も僧をはじめ多くの門徒が戦いに加わりました。九頭竜川を挟んで両軍の戦いは二十数日に及びましたが、一揆軍は敗れ、越前はもちろん、加賀国江沼郡にいたるまで朝倉軍に従うこととなりました。しかし



朝倉義景感状 (松田一郎氏蔵)



朝倉景鏡感状 (松田一郎氏蔵)

美濃・尾張 (岐阜県・愛知県西部) で着々とその準備を整え、一五六八年 (永禄十一)、六万の兵士を率いて京都に向かいました。信長は京都に入り、將軍足利義栄を追放すると、朝廷に頼んで足利義昭を十五代將軍とし、近畿地方から中国地方へと、日本統一への道を進めていきました。

一五七〇年 (元龜元) 四月、信長と朝倉氏の戦いが始まりました。信長軍が敦

一揆の勢力は根強く、その後大小の争いが幾度となく続きました。

一五五六年 (弘治二)、朝倉義景が治めていた時、將軍足利義輝の仲立ちにより一時仲間おりをして、一揆はひとまず鎮まりました。

このように朝倉氏と対立していた一向一揆勢でしたが、力を持ち始めた信長と戦うため、その後朝倉氏と手を結ぶようになりました。天下統一をねらっている信長は、

賀に攻め入った知らせを聞くと、義景は四万の兵を引きつけて対戦しました。景鏡は一千の兵で穴馬（和泉村）から笹又峠の警備にあたりました。本隊は敦賀から近江（滋賀県）に出て、近江国の浅井長政と力を合わせ、北近江の戦いで信長軍を破りました。

一方信長は、本願寺の勢力を自分の支配下に入れようと、石山本願寺（大阪府大阪市）を攻めました。本願寺が義景に援軍を求めてきたので、義景は浅井軍とともにこれを助けました。この戦いに景鏡は大野軍勢を引きつけて参加し、めざましい働きをしました。

冬になると両軍ともに戦いを進めることができず、信長は將軍義昭を中に入れて和睦し、十二月十三日、信長は兵を引きあげて美濃（岐阜県）に帰り、朝倉軍も一乗谷（福井市）に引きあげました。

一五七二（元龜三）年七月、信長は再び朝倉を討とうと兵をあげ、長政の城の近くの虎御前山（滋賀県湖北町）に城を築きました。義景はすぐに景鏡を先頭にして五千の兵を長政の小谷城（滋賀県湖北町）へ送り、柳ヶ瀬（滋賀県伊香郡）に本陣を構えましたが、信長軍は一戦も交えずに美濃に引きあげました。義景は信長の作戦とも知らず、わずかの兵を残して一乗谷に帰ってしまいました。

翌年七月、信長は突然兵をあげ、浅井軍の小谷城を攻めてきました。義景はこの知らせを聞いて景鏡に出兵を命じましたが景鏡はそれに従わず、義景は国中の兵を集めて、みずから一乗谷を出て近江へ向いました。しかし、この戦いで義景の軍は家来が多く死んだので、義景は一乗谷へ逃げ帰りました。

そのとき居(亥)山城において大野を治めていた景鏡は、義景に対して、大野に来て軍を立て直すように勧めたので、義景は賛成し大野の洞雲寺に入りました。一五七三年(天正元)三月十五日、一乗谷を引き払い、当時野口(市図書館のあたり)にあったと思われる洞雲寺に着いた義景は、翌日、さっそく平泉寺(勝山市)に使いを送り、助けを求めましたが、平泉寺と信長の間にはすでに約束ができていました。

一方信長は、景鏡に対しても信長軍に味方すれば褒美を与えると条件を出しました。当時越前の大部分は信長の味方になっており、このまま義景の味方をするのも勝つ見込みがないと考えた景鏡は、平泉寺と手を組んで信長に味方することに決心しました。

そこで義景のいる洞雲寺に使いの者をやり、洞雲寺は城から遠く、いろいろ相談するのに不便だからと、六坊賢松寺(所在地については不明であるが、現在の

明倫町曹源寺あたりともいわれる)へ移るよう勧めました。

一五七三年(天正元)八月十九日、義景は六坊賢松寺へ移りましたが、翌二十日の早朝、景鏡は平泉寺衆徒と一緒に義景を襲いました。義景は景鏡が裏切ったことを知り、「七顛八倒 四十年中 無他無自 四大本空」(苦しみがいた四十年の生涯であったが、結局他もなく自もなく空しいものであった)という辞世を5残して自害してしまいました。現在、義景公園内(泉町)にある朝倉義景の墓は、

後の時代に建てたものです。

景鏡の最期と平泉寺の焼討ち 景鏡は織田方に味方し義景を滅ぼしましたが、

その後、柴田勝家・明智光秀・羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)たちの軍に攻められました。さいわい秀吉の情けで景鏡を攻めることは中止され、もとどおり居(亥)山城主となることを許されました。この時、義景を討った活躍が信長に認められて土橋信鏡と名前をかえています。

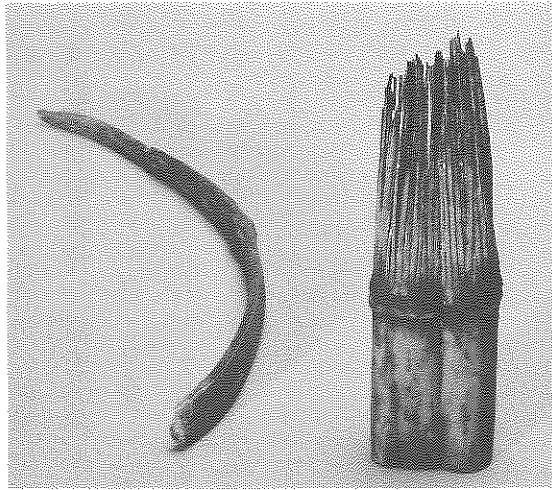
信鏡(景鏡)は越前国の守護になろうとして、なんとかして信長に入られようとなりましたが、守護職には信鏡よりはるかに地位の低かった前波長俊(桂田播磨守長俊)が任命されました。ところが、長俊は農民に重い税をかけ自分は贅(ぜい)沢な生活を始めたので、人々は長俊に反感を持つようになりました。

その上、一時鎮まっていた一向一揆の動きが再び激しくなり、長俊に反感を持つ農民たちとともに前波氏の居城である一乗谷（福井市）に向いました。一揆の大將は日ごろ長俊と仲の悪かった富田長秀（長繁）でした。このようにして長俊もわずか五カ月で滅んでしまったのです。その後、長秀は自分勝手に越前守護代と名乗って府中（武生市のあたり）に住みました。

一揆は越前全域に広まり、居（亥）山城の信鏡も一揆に攻められたため、妻子とともに平泉寺（勝山市）に逃げ、宝光院に身を寄せました。平泉寺軍は一揆軍に対抗して村岡山（勝山市）を攻め、一方、一揆軍の大將である杉浦壱岐は逆に北谷方面から平泉寺の背後を襲い火を付けたために、七百年間大きな勢力を持ち続けた平泉寺も、全て燃えてしまいました。一五七四年（天正二）四月十四日のことでした。

平泉寺の僧兵たちはちりぢりに逃げ、信鏡もまた逃げる途中、袋田（勝山市）で殺されました。こうして大野全域は一揆軍に占領されてしまい、浄土真宗高田派の寺院や篠座神社などが焼かれました。

その後、杉浦壱岐は石山本願寺から大野郡司に任じられて居（亥）山城にいましたが、国は長い戦いによって荒れ果て、人々は生活に疲れていました。そのう



一乗谷朝倉氏遺跡から出土した茶せんと茶杓  
(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵)

え一揆いっぎに加わった町人や農民に対しては何の褒美ほうびもありませんでした。不満に思った人々は、当時各地にあった講こう(決められた日に人々が集まってお経をあげ、説教せつきょうを聞き、食事を共にする集まり)などを中心に再び一揆いっぎをおこすことになり、越前えちぜん全域ごんらんが混乱こんらんしました。

越前えちぜん全域ごんらんが混乱こんらんしました。  
信長のぶながは越前えちぜんの争乱そうらんを聞くと、一五七五年(天正三)、本隊を敦賀から府中ふちゅうへと

進めました。一方、信長軍のぶながの部将ぶしょうである金森長近かなもりながちか・原彦次郎はらひこじろう(政茂まさしげ)の率いる軍は郡上八幡ぐじょうはちまん(岐阜県)から油坂峠あぶらざかとうげ(一説には蠅帽子峠はえぼうしとうげ)を越えて穴馬あなま(和泉村)に入り、石徹白いとしろ(岐阜県郡上市白鳥町)・白山中居ちゅうきゅう神社の神職しんしやくであった石徹白彦右衛門尉長澄いとしろひこごうえもんじようながずみや、高田派の専福寺せんぶくじ(友兼ともかね)・称名寺しよみんじ(美山町折立みやまのりたて)などを味方につけながら、一気に杉浦壱岐すぎうらいきを攻めました。この戦いで大野の一揆いっぎはおさまり、大野郡の三分の一は原はら氏に、三分の二は金森氏かなもりしに与えられました。

この後大野は金森長近の城下町として発展することになりました。

**大野の芸能文化** 鎌倉時代から室町時代になると、武家の文化や貴族の文化、

中国の文化などが混じり新しい文化が生まれました。武家や貴族、禅宗の僧の間では、茶道や生花などが親しまれ水墨画も鑑賞されるようになり、平安時代から娯楽として親しまれてきた猿楽や田楽をもとに能や狂言といった新しい芸能も生まれました。これらの文化は一部の人々に親しまれ、日本各地に広まってきました。

朝倉氏の本拠地であった一乗谷（福井市）にも、このような風潮をうけて京都から武家や貴族、学問や芸術の分野で活躍している人たちが多く訪れるようになります。都の文化が盛んに取り入れられました。茶道や能楽など、当時の武士階級の間ではやっていた芸能も取り入れられ、また、さまざまな地域から商人が来るようになると、町は活気に満ち溢れました。一乗谷朝倉氏遺跡からは、このような当時の生活の様子がわかるものがたくさん見つかっています。

特に能については、芸能を楽しむだけでなく、それにまつわる能面師が数多く輩出され、大野郡からも才能のある優れた能面師が次々と世に出たと伝えられています。鎌倉時代末期には赤鶴という能面師が現れました。室町時代から戦国





猿楽の劇面（高津靖生氏藏）

時代にかけては、平泉寺の僧であった三光坊  
が出て、その後三光坊の弟子たちが分かれて  
各流派をつくり、うち一つが大野出目家とな  
りました。大野出目家の初代である出目是閑  
吉満は、三光坊の弟子で、同じく平泉寺の僧  
であった大光坊の弟子にあたります。

彼は越前の生まれで最初は鎧をつくる職人  
でしたが、大野に移住してから能面をつくるよ  
うになったといわれています。一五九五年（文  
禄四）には豊臣秀吉から「天下第一」の朱印をもらい、能面師としての地位を確立  
しました。その後、大野出目家は江戸後期まで面打ち職人として続いていきまし  
た。

また、庶民の間でも、村々に小さな神社やお堂が建てられ、人々は豊作の祈願  
や感謝のために、舞などを奉納しました。現在、市内数ヶ所の神社で奉納されて  
いる里神楽は、当時の面影を今に伝えています。

